



映画批評月間

フランス映画の現在

Mois de la critique — Nouveaux rendez - vous du cinéma français

※やむをえない事情によりイベント内容、ゲスト、作品及び上映時間が変更になる場合がございます。
ウェブサイト (<http://www.eurospace.co.jp>) にてご確認の上、チケットをご購入ください。

2/20 [土]	★各回作品解説あり
11:00	アリスと市長 (105分)
13:15	シェエラザード (112分)
15:30	リベルテ (138分)

2/21 [日]	
12:30	今晚おひま? (78分)
14:20	言い知れぬ恐怖の町 (90分)
16:20	ソロ (89分)

2/22 [月]	
11:30	シノニムズ (123分)
14:05	君は愛にふさわしい (107分)
16:20	カプールのツバメ (82分)

2/23 [火・祝日]	
11:20	マダム・ハイド (96分)
13:20	赤いトキ (87分)
15:15	ティップ・トップ ふたりは最高 (107分) ★上映後トークあり

2/24 [水]	
11:40	20年後の私も美しい (95分)
13:55	ポール・サンチェスが戻ってきた! (101分)
16:00	ワイルド・ボーイズ (110分)

2/25 [木]	
11:20	僕らプロヴァンシアル (137分)
14:10	赤いトキ (87分)
16:10	宝島 (97分)

2/26 [金]	
12:10	奇跡にあづかった男 (90分)
14:05	シェエラザード (112分)
16:25	ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像 (85分)

////////////////////

トークイベント

★2/20[土]各回上映前
坂本安美による作品解説
(アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム主任)

★2/23[火・祝]
『ティップ・トップ ふたりは最高』上映後
クリス・フジワラ(映画批評家)による
ボゾン監督、モッキー監督に関するトーク

★2/27[土]『地上の輝き』上映後
山崎まどか(コラムニスト)によるトーク
「ギィ・ジル作品について」

★2/28[日]『シノニムズ』上映後
宮崎大祐(映画監督)によるトーク

23日、27日、28日トーク司会:坂本安美

2.20[土] 3.4[木]



フランス映画の現在

Mois de la critique — Nouveaux rendez - vous du cinéma français

2021.2.20[土] 3.4[木] //////////////////////////////////////

ユーロスペース



ジュリアン・ジェステールによるセレクション
(リベラシオン)

オリヴィエ・ペールによるセレクション
(アルテ・フランス・シネマ)

////////////////////////////////////

<http://jc3.jp/mdlc/>

珠玉の23作品
一挙上映

Mois de la critique — Nouveaux rendez - vous du cinéma français

////////////////////////////////////



アンスティチュ・フランセが、フランスの批評家、専門家、プログラマーと協力し、最新のフランス映画を選び
すぐって紹介する特集「映画批評月間～フランス映画の現在」。vol.01では、文化欄が充実しているので有
名なフランスの大手日刊紙「リベラシオン」のジュリアン・ジェステール、vol.02では、世界中の才能ある映画作
家たちの作品を見出し、支援している「アルテ・フランス・シネマ」のオリヴィエ・ペールが選定を担当しました。
今回の上映では、vol.01、02で上映された新旧のフランス映画、珠玉の23本を一挙上映します。

////////////////////////////////////

現在の若手監督たちが撮ったこれらの作品は、
まさに高い志や独特な想像力によって、
使い古されたコードや時代が強い陰鬱な運命に
はっきりと抵抗を示していると言えるだろう。

////////////////////////////////////

インスピレーションに溢れた映画作家たちに
耳を傾け、斬新な作品に寄り添い続けたいという
私たちの意思是尽きることがありません。

—————オリヴィエ・ペール
Olivier Pere

—————ジュリアン・ジェステール
Julien Gester

「リベラシオン」文化部チーフ、映画批評家。1986年ストラスブール生まれ。2012
年よりフランス日刊紙「リベラシオン」のジャーナリスト、映画批評家として活動、現
在は同紙の文化部チーフを務める。それ以前は人気カルチャー雑誌「レ・ザンロ
キュプティブル」に執筆、ラグジュアリーファッション誌「Mastermind」の編集
長、「Grazia」フランス版創刊にも携わる。フランス、世界各地の映画祭、シネクラ
ブなどでは日本映画、アメリカのコメディを積極的に紹介している。作曲家でもあり、
映画音楽も手がける。

アルテ・フランス・シネマ ディレクター。シネマテーク・フランセーズで上映プログラ
ムに携わりながら、「レ・ザンロキュプティブル」などで映画批評を執筆。その後、
2004～09年カンヌ国際映画祭監督週間ディレクター、2008～12年ロカルノ国
際映画祭アーティスティック・ディレクターを務める。この間、富田克也の「サウ
ダージ」、三宅唱の「Playback」などがコンペティションに選ばれ、2011年には青
山真治(『東京公園』)が金豹賞(グランプリ)審査員特別賞を受賞。2012年以
降はアルテ・フランス・シネマのディレクターを務め、フランスをはじめ、世界中の映
画作家の作品を支援し、共同製作している。またアルテのサイトで定期的に映画
評を執筆し続けている。

Information

セルジュ・ボゾン監督
初期2作品を上映!



『モッズ』、『フランス』を35mm
(英語字幕/日本語同時通訳付)で上映します。
開催日:2月14日(日)
13時～『フランス』16時～『モッズ』
会 場:アンスティチュ・フランセ東京
エスパス・イマージュ
詳細はこちら▶<https://www.institutfrancais.jp/tokyo/>

映画批評月間
～フランス映画の現在をめぐって～
vol.3 開催!

第3回はヌーヴェルヴァーグの監督たちを輩出し
たことでも有名なフランスの映画雑誌「カイエ
・デュ・シネマ」の新編集長マルコス・ウザルによるセ
レクションで、フランスの最新のベスト作品、そして
知られざる名作をご紹介します。3月5日(金)にユー
ロスペースにてオープニング特別上映を開催!
詳細はこちら▶<https://www.institutfrancais.jp/tokyo/>

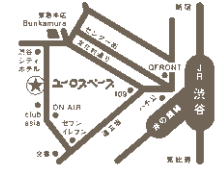
「フランス映画の現在」を見る前に
「アートハウスプレス ArthousePress/
藝術電影館通信」で関連映像をチェック!

「ArthousePress/藝術電影館通信」では、Vol.2の
作品を選定したオリヴィエ・ペール氏の作品解説
やセルジュ・ボゾン監督のインタビュー、坂本安美
さんのトークを見ることができます。映画を見る前に、
また、映画を見た後にもチェックして、
より深く、映画をお楽しみください。
<https://arthousepress.jp/>

主催:ユーロスペース/一般社団法人コミュニティシネマセンター
企画協力:アンスティチュ・フランセ日本 助成:アンスティチュ・フランセパリ本部
フィルム提供及び協力:バスフェール/カルロッタ・フィルム/エチュ・フィルム
インディセールズ/ロブスター/MK2/フィルム・ブティック/キノフィルムズ/ロブスター・フィルム
モッキー・デリシャス・プロダクツ/ブティ・ビュロー/SBS/東北新社
特別協力:笹川日仏財団/Bartlab/ヴェッター公園



渋谷・文化村前交差点左折
ユーロスペース
EUROSPACE
03(3461)0211 eurospace.co.jp



ジュリアン・ジェステールによるセレクション

(リベラシオン)



ポール・サンチェスが戻ってきた！

Paul Sanchez est revenu !
2018年／101分／カラー／デジタル／フランス語
監督：パトリシア・マズィ　出演：ローラン・ラフィット、ジタ・オンロ、フリップ・ジラル

10年前に失踪した凶悪犯罪者・ポール・サンチェスが目撃されたという噂が広まる。警察署では誰もそのことを本気にしなかったが、若い警官のマリオンは違った。

●このような場所を映画に撮れるのはパトリシア・マズィを置いて他にないだろう。丘陵、レ・ザルク、谷、国道…ラオール・ウォルシュの映画に見られるような広大な世界。ある人物の狂気が拡散し、やがてその狂気は集団の中へと波及していく。――J.ジェステール



ワイルド・ボーイズ

Les Garçons sauvages
2018年／110分／モノクロ&カラー／デジタル／フランス語
監督：ベルトラン・マンディエ
出演：ヴィマラ・ボンス、ボリヌス・ロリラル、ディアンヌ・ルクセル、アナエル・スノーク、マチルド・ワルニエ、サム・ルーウィック、エリカ・レーヴェンソン

20世紀初頭。良家出身の5人の少年が卑劣な罪を犯してしまふ。罪を償うため謎の船長に預けられた少年たちは、過酷な航海の旅へと連行される。ある無人島に座礁すると、そこには快楽を与えてくれる幻想的な植物が生い茂り、欲望に溺れる少年たちの身体は次第に変異していく。

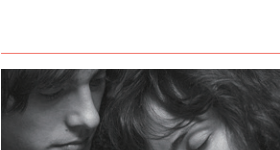
20世紀初頭。良家出身の5人の少年が卑劣な罪を犯してしまふ。罪を償うため謎の船長に預けられた少年たちは、過酷な航海の旅へと連行される。ある無人島に座礁すると、そこには快楽を与えてくれる幻想的な植物が生い茂り、欲望に溺れる少年たちの身体は次第に変異していく。



20年後の私も美しい

La Belle et le Bête
2018年／95分／カラー／デジタル／フランス語
監督：ソフィー・フリエール　出演：サンドリース・ケペルラン、アガット・ボニゼール、メルヴィル・ブロー

大学生のマルゴーは成り行き任せで日々を生きているが、ある日、40代半ばの女性マルゴーと知り合い、自分たちがひとつの人生の異なる年齢を生きていることを知る。『イサドラの子どもたち』で透明感のある美しさで魅了したアガット・ボニゼールと、コメディエンスとしての才能抜群のサンドリース・ケペルランがひとりの女性の20代と40代を軽やかに繊細に演じている。



僕らプロヴァンシアル

Mes provinciaux
2018年／137分／カラー／デジタル／フランス語
監督：ジャン＝ポール・シヴェラック　出演：オンドラニク・マネ、ゴンザグ・ヴァン・ベルヴェセレンス、コランタン・フィラ

エティエンスは大学で映画を学ぶため、パリに出る。そこで映画への情熱を同じくするマティアスとジャン＝ノエルと出会う。しかし、時がたつに連れ、彼らの抱いていた幻想が変質していく。

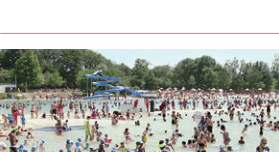
●シヴェラックは、ブレッソン、ロメール、ユスターシュと同じような方法で、アナクロニズムを引き受けている。たとえば現在そのものを言葉の中に詰め込み、それを古くからの思想によってねじ曲げ、時を越えし語られる筋立ての中で純化させる。――マルコス・ウザル



シェエラザード

Shéhérazade
2018年カンヌ国際映画祭批評家月間出品
2018年／112分／カラー／デジタル／フランス語
監督：ジャン＝ベルナール・マルラン
出演：ディラン・ロペール、ケンザ・フォルタス、イディール・アズグ

ザカリは17歳、刑務所を出所し、マルセイユの下町をぶらついていたところ、街角で客引きをするシェエラザードと運命的な出会いをする。しかし、ふたりは社会の荒波に巻き込まれていく…。本作は移民の街・マルセイユへのオマージュでもあり、出演者は現地でキャストイングされた。主演のふたり、そして監督はセザール賞新人賞を獲得、ジャン・ヴィグ賞も受賞した。



宝島

L'île au trésor
2018年／97分／カラー／デジタル／フランス語
監督：ギヨーム・ブラック

パリの北西にあるレジャー・アイランドでのひと夏。世界の喧騒とどこかで響き合いながら、この場所には有料の海水浴場もあれば、人目につかない片隅、子どもたちが探求する王国もある。

●イルド・フランスのセルジュー＝ポントワーズにあるこのレジャー・アイランドは私の子ども時代の一部を成しており、今日でもなおとても鮮明な記憶と結びついています。――G.ブラック

●イルド・フランスのセルジュー＝ポントワーズにあるこのレジャー・アイランドは私の子ども時代の一部を成しており、今日でもなおとても鮮明な記憶と結びついています。――G.ブラック

――マルコス・ウザル

ギィ・ジル
Guy Gelles

アルジェリアの首都アルジェ生まれ。子どもの頃より映画ファンで、20歳で処女短編『消された太陽』を監督。アルジェリア戦争下の1960年、パリへ移住。ビエール・ブロンベルジュの援助により短編を監督、その中の『Au niveau des baisers』を気に入ったジャン＝ピエール・メルヴィルから援助を受けて初長編作品『海辺の恋』を3年がかりで製作、ロカルノ映画祭で批評家賞を受賞。長編第2作『オー・パン・クベ』は、M.デュラスから賛辞の言葉が寄せられた。3作目『地上の輝き』はイエール映画祭グランプリ、4作目『反復される不在』(72)はジャン・ヴィグ賞を受賞。

ユスターシュやガレルとさほど遠くなく、彼らの従兄弟のような存在でありながら、人目にあまり触れることなく映画を撮り続けていたギィ・ジル。忘却に抗う力を秘めていた彼の映画が、ようやく発見、再発見され、フランスをはじめ世界中で徐々に評価が高まっている。――J.ジェステール

オリヴィエ・ペールによるセレクション

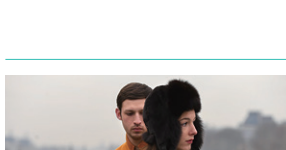
(アルテ・フランス・シネマ)



アリスと市長

Alice et le Maire
2018年カンヌ国際映画祭監督週間出品
2018年／2019年／105分／カラー／デジタル／フランス語
監督：ニコラ・バジエ　出演：ファブリス・ルキーニ、アナイス・ドゥモ스티エ、ノラ・ハムザウ

リヨンの市長ポールは、アイデアが一切浮かばなくなり、若き哲学者アリスに助けを求めることに。『木と市長とメディアテーク』で高校教師を演じたルキーニが26年後、まさにロメール的コメディで、老いとともに人生を見つめ直す市長を、流暢とした魅力で人気の若手女優ドゥモ스티エがアリスを演じている。



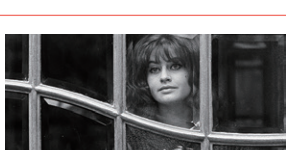
シノニムズ

Synonymes
2018年カンヌ国際映画祭金熊賞受賞
フランス＝イスラエル＝ドイツ／2018年／123分／カラー／デジタル／フランス語　R15+
監督：ナダヴ・ラビド　出演：トム・メルシエール、カンタン・ドルメール、ルイズ・シュヴィヨット

●『シノニムズ』は、パリの空っぽのアパルトメントで凍えそうになった裸体と共に、象徴的な死とある誕生によって幕を開ける。物語は、祖国イスラエルからパリへと亡命し、文化、言語、国、すべてを白紙に戻し、未知の場所でゼロから生きることを選んだラビド監督自身の人生に着想を得ており、主役のヨアブは監督の分身であるだろう。――O.ペール

●『シノニムズ』は、パリの空っぽのアパルトメントで凍えそうになった裸体と共に、象徴的な死とある誕生によって幕を開ける。物語は、祖国イスラエルからパリへと亡命し、文化、言語、国、すべてを白紙に戻し、未知の場所でゼロから生きることを選んだラビド監督自身の人生に着想を得ており、主役のヨアブは監督の分身であるだろう。――O.ペール

――O.ペール



海辺の恋

L'Amour à la mer
1963年／73分／カラー＆モノクロ／デジタル／フランス語
出演：パトリック・ジュアネ、マーシャ・マリ、ベルナール・ヴェルレ
ジャンル：シモーヌ・バリ、ジャン＝ピエール・レオ

ジュスヴィエーヴは水兵のダニエルと海辺の街ドーヴィルで落ち合い、愛し合う。ヴァカンスが終わり、ダニエルは prest の駐屯地に、ジュスヴィエールはパリに戻り、再会することを待ち望みながら、それぞれの生活を送る。ダニエル同様アルジェリア戦争から戻ってきた水兵ギィの感情がふたりのそれと混ざり合う。監督自身がギィ役で出演している。

●この作品での愛は顔によって想起させられ―何度も繰り返し見せられる女性の顔、視線、―それにはただただ感嘆させられる。そう、こうした試みはこれまで一度も映画でなされたことがなかっただろう。――マルグリット・デュラス



君は愛にふさわしい

Tu m'érites d'un amour
2018年カンヌ国際映画祭批評家週間出品
2018年／2019年／107分／カラー／デジタル／フランス語
監督：アフシア・エルジ　出演：アフシア・エルジ、ジェレミ・ラウルト、ジャンヌ・ブジアニ

恋人レミの裏切りを知り、リラは苦しむ。ボリビアに旅立ったレミから、二人の関係はまだ終わっていないと告げられ、さらに苦しむリラは、友人たちとの会話、新たな出会いの中でもがき、愛の行方を求めて彷徨う。A・ケシユやA・ギロディらの作品に出演している女優エルジの初監督作。カンヌ国際映画祭で「宝石のように美しいラブストーリー」と絶賛された。



見えない太陽

L'Adieu à la nuit
フランス＝ドイツ／2019年／102分／カラー／デジタル／フランス語
監督：アンドレ・テシネ　出演：カトリーヌ・ドヌーヴ、ケイシー・モッチ・クライン、ウーヤラ・アマムラ

地方で農場を営むミュリエルは、孫息子アレックスがイスラム教に入信したことを知る。その教団がシリアのテロリストとつながりがあり、アレックスもシリアに向かおうとしていることを知り、彼を引きとめようとする。ドヌーヴがもともと信頼を置く名匠アンドレ・テシネによって、大女優の魅力が最大限に引き出されている。

●この作品での愛は顔によって想起させられ―何度も繰り返し見せられる女性の顔、視線、―それにはただただ感嘆させられる。そう、こうした試みはこれまで一度も映画でなされたことがなかっただろう。――マルグリット・デュラス

――O.ペール



オー・パン・クベ

Au pan coupé
1967年／71分／カラー＆モノクロ／デジタル／フランス語
出演：パトリック・ジュアネ、マーシャ・マリ、ベルナール・ヴェルレ
ジャンル：シモーヌ・バリ、ジャン＝ピエール・レオ

ジャンヌはかつての恋人ジャンを思い返し、今もその恋を生きている。ジャンは15歳で少年院に入り、ブルジョワ的な世界もビート族たちの世界も拒否して死んでいた。彼の死を知らないジャンヌにはジャンが亡霊のように寄り添っている。

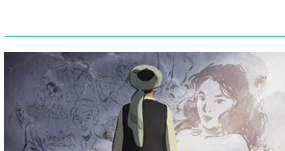
●この作品での愛は顔によって想起させられ―何度も繰り返し見せられる女性の顔、視線、―それにはただただ感嘆させられる。そう、こうした試みはこれまで一度も映画でなされたことがなかっただろう。――マルグリット・デュラス



リベルテ

Libérté
2019年カンヌ国際映画祭「ある視点」部門受賞
フランス＝ポルトガル＝スเปน＝ドイツ／2019年／138分／カラー／デジタル／フランス語　R15+
監督：アルペール・セラ　出演：ヘルムート・バーガー、マルク・スジニ、イリアーナ・ザベト、リュイス・セラ

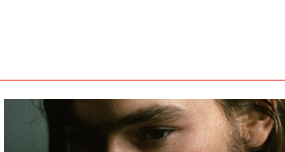
『ルイ14世の死』の鬼オアルペール・セラがフランス革命前夜の18世紀の退廃貴族たちの性、欲望のありか、サド的世界に迫る。ルイ16世のビュリタンの厳格な宮廷から追放された自由主義者(リベルタン)たちは、伝説的ドイツ人公爵ワルジャンの支援を求めて国境を越える。



カブールのツバメ

Les Hirondelles de Kaboul
2019年カンヌ国際映画祭ある視点部門コンペティション出品
フランス＝ルクセンブルク＝スイス／2019年／82分／カラー／フランス語／アニメーション
監督：脚本：ザブー・ブライトマン & エレア・ゴベ・メヴェレック

1998年夏、アフガニスタンのカブールはタリバン勢力の支配下に。ズナイラとモーセンのカップルは、暴力と悲惨な現実の中でも希望を持ち続けていた。歴史の中で翻弄される夫婦や恋人たちの日常のささやかなやり取り、感情が繊細に描かれ、心をつつ傑作アニメーション。スワン・アルローら、フランスで人気上昇中の俳優たちが声で出演している。



地上の輝き

Le Clair de terre
1969年／102分／カラー＆モノクロ／デジタル／フランス語
出演：パトリック・ジュアネ、エドウィジュ・フィエール、アニメ・ジラルド、ミシュリーヌ・ブーレル

チュニジア生まれで、母の死まで幼年期をその地で過ごしたビエール、いまはパリのマレ地区に父親と住んでいる。突如、パリを離れる必要を感じたビエールはチュニジアの首都チュニスに向かう。そこでかつての教師に導かれ、自分の過去の足跡を辿る。

ジャン＝ピエール・モッキー
Jean-Pierre Mocky

1933年ニース生まれ。フランス国立高等演劇学校入学後、俳優として頭角を現す。ルキノ・ヴィスコンティ監督『夏の嵐』で助監督を務めた後、1959年処女長編作『今晚おひま?』を発表。『ヌーヴェルヴァーグの従弟』のような作品と評されるが、風刺的でメランコリック、そして類をみない反体制的な作風で他とは一線を画し、メインストリームから外れた場所で、自由に映画を撮り続ける。ラブ・コメディから風刺的コメディ、犯罪映画や軍隊もの、政治的作品から幻想的な作品まで、ひとつのジャンルにおさまることなく、慣例化された制度、価値に反旗を翻し、アナーキーな世界観や荒々しいまでのユーモアを刻印してきた。2019年8月8日死去。

モッキーの映画には、ユーモアとファンタジーがあるとともにメランコリー、暴力、そして悲劇も存在しています。――O.ペール



ソロ

Solo
フランス／1970年／89分／カラー／デジタル／フランス語
出演：ジャン＝ピエール・モッキー、アンヌ・ドゥルルーズ、デニス・ル・ギヨ

ヴァイオリン奏者のヴァンサンは宝石泥棒でもある。弟のヴィルジルはアナーキストのグループに属し、殺人にも手を染めていた。ヴァンサンはこれ以上殺戮が繰り返されないよう、警察に先回りしてヴィルジルを追いかける。

●アクションに次ぐアクション、そして演出のアイデア満載の本作は、68年5月革命直後についてのモッキー自身の考察から出発している。シニックなアンチヒーローを演じるモッキー、ジョルジュ・ムスタキのテーマ曲によって愁いを帯びたロマンチスムに包まれたフィルムノワール。――O.ペール

セルジュー・ボゾン
Serge Bozon

1988年初長編作『友情』を発表。次作のミュージカルコメディ『モッズ』（2003）でベルフォール国際映画祭レオ・シェア賞、第一次世界大戦を描いたシルヴィー・テステュー主演の『フランス』（2007）でジャン・ヴィグ賞受賞。その後、『ティップ・トップ ふたりは最高』を発表（カンヌ国際映画祭監督週間）。最新作『マダム・ハイド』は、第70回ロカルノ国際映画祭で主演女優賞受賞。

映画批評家として『カイエ・デュ・シネマ』『So Film』などに寄稿。俳優としても『倦怠』（S.カーン）、『青の寝室』（M.アマリック）などに出演している。

●ボzonはかつてゴダールが取った方法を応用してみせる。犯罪映画を口実に、まったく別のものを語ること。では本作では何が語られているのか。おそらく傑出した前作のタイトルの中にその答はあるだろう、つまり『フランス』である。――O.ペール



今晚おひま？

Les Dragueurs
フランス／1959年／78分／モノクロ／デジタル／フランス語
出演：ジャック・シャリエ、シャルル・アズナブール、ダニー・ロバン、アヌーク・エーメ

土曜日の夕暮、ブレイボーイのフレディとまじめな銀行員ジョゼフは女の子を『ひっかけに』街に繰り出す。アン・リッド、サンジェルマン・デ・ブレ、ジャンゼリゼ通り、モンマルトル…様々な女性たちと出会い、彼女たちの人生を垣間見る。29歳のジャン・ビエール・モッキーが自伝的な要素を交えて撮った処女作。日本で公開された唯一のモッキー作品。

モッキーの映画には、ユーモアとファンタジーがあるとともにメランコリー、暴力、そして悲劇も存在しています。――O.ペール



赤いトキ

L'Ibis rouge
フランス／1986年／87分／カラー／デジタル／フランス語
出演：ミシェル・セロー、ミシェル・シモン、エヴリーヌ・バイル
監督・脚本：ザブー・ブライトマン & エレア・ゴベ・メヴェレック
孤独な会社員ジェレミーは赤いマフラーで女性たちを絞殺してきた。同じ界隈に住む賭博好きのレーモンは、借金を返済するために愛する妻のエヴリーヌに宝石を売るよう頼む。そんなふたりが出会い、ある計画が立てられる…。

●ファンタスティックかつポエティックにフランス社会を描いたモッキーの代表作のひとつ。本作が遺作となった偉大な俳優ミシェル・シモンへのオマージュでもあり、サン＝マルタン運河沿いで撮られた『素晴らしき放浪者』や『アタラント号』の記憶が蘇ってくる。――O.ペール



ティップ・トップ ふたりは最高

Tip Top
フランス＝ルクセンブルク／2014年／107分／カラー／デジタル／フランス語／出演：イザベル・ユベール、サンドリース・ケペルラン、フランソワ・ダミアン、キャロル・ロシェ

フランス北部でドラッグの密売に関わっていたアルジェリア系の情報屋が殺された。警察署内部を探るため、ふたりの女性監察官エスターとサリが派遣された。ひとりは股ひきみをかけ、もうひりは覗き見る…そう、ふたりは最高のコンビ!

●ボzonはかつてゴダールが取った方法を応用してみせる。犯罪映画を口実に、まったく別のものを語ること。では本作では何が語られているのか。おそらく傑出した前作のタイトルの中にその答はあるだろう、つまり『フランス』である。――O.ペール



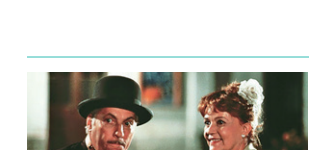
言い知れぬ恐怖の町

La Cité de l'indicible peur

フランス／1964年／90分／モノクロ／デジタル／フランス語

出演：ブールヴル、ジャン＝ルイ・バロー、ジャン・ボワレ、ヴェロニク・ノルデー

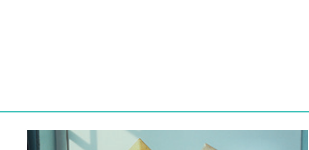
逃亡した偽札偽造者の捜索に乗り出したトリケ警部は、オーヴェルニュ地方の村バルジュにたどり着く。そこには摩訶不思議な住民たち、出来事があふれていた…。ベルギーの幻想小説家ジャン・レーの原作をモッキーが映画化。撮影はラング、オフェルスらの作品も手がけたオイゲン・シュプタン。製作当時再編集を強いられたが、監督自ら『ディレクター・カット』として蘇らせたバージョンで上映。



奇跡にあずかった男

Le Miraculé
フランス／1986年／90分／カラー／デジタル／フランス語
出演：ミシェル・セロー、ジャンヌ・モロー、ジャン・ボワレ
監督・脚本：ザブー・ブライトマン & エレア・ゴベ・メヴェレック
非合法すれすれでなんとか暮らす気ままなバビュは、保険金欲しさに事故で足が麻痺したと偽り、献身的な元姉妹のサビースを引き連れてルルドへと偽の治療旅行に出発するが…。

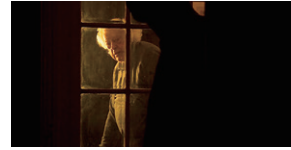
●モッキーは、この緯日のような作品で多種多様な人々をこれまでに以上に鮮やかに浮かび上がらせてみせる。――O.ペール



マダム・ハイド

Madame Hyde
フランス／2018年／96分／カラー／デジタル／フランス語
出演：イザベル・ユベール、ロマン・デュリス、ジョゼ・ガルシア
パリ郊外の高校に勤める内気な物理学の女性教師ジキルは生徒たちに見下されている。ある日、彼女は、実験中に失神し、神秘的で危険な力を感じるようになる。ステーションソンの代表作『ジキル博士とハイド氏』を19世紀後半のブルジョア社会ではなく現代のパリ郊外を舞台に、男性ではなく女性を主人公に自由に脚色されたボzonの最新作。

批評家のドキュメンタリー
ヌーヴェルヴァーグの映画批評家監督のひとりであり、誰もが敬愛した伝説的存在の真髄に迫る



ジャン・ドゥーシェ、ある映画批評家の肖像

Jean Douchet, l'enfant agité
2017年／85分／カラー／デジタル／フランス語
監督：ファビアン・アージュジュ、ギヨーム・ナミュール、ヴァンサン・アセール

2019年に90歳で亡くなるまで、その類まれなる知性、教養、ユーモアによって、映画作家や映画ファンたちに影響を与えてきた映画批評家ジャン・ドゥーシェ。3人の若い監督たちがドゥーシェを追った貴重なドキュメンタリー。●ジャンは映画の意味を目覚めさせる術を知っている。映画の送ってくる手紙を読み解くように。――アルノー・デブレシャン

J.ジェステールセレクション

批評家が選んだふたりの映画作家の特集

批評家が選んだふたりの映画作家の特集